

K-839

長者屋敷遺跡

第1次調査概報



1979

長井市教育委員会

長者屋敷遺跡第1次調査概報

昭和54年3月

序

西山山麓は古くから「土器や石器のでるところ」として知られておりました。とりわけ長者原地内には、土器や石器の散布も多く致るところで採集されたようです。

しかし開発が進むにつれ生産性の向上と裏腹に、遺跡は大きく壊されてきたことを惜しく思います。それは私ども祖先の生活に関する情報のそう失にとどまらず心のふるさとを失うにも似たさびしきを覚えるからです。

本書によって長井の古代史の解明の一助となり、かつ遺跡の保護と活用によって新しいふるさとづくりに資されるならこの上ない喜びとするものです。

終りにあたってご指導ご協力を賜った関係各位、また地元土地所有者発掘作業に従事された方がたに対し、深甚なる謝意を表します。

昭和54年3月

長井市教育委員会

教育長 守谷辰雄

目 次

I 遺跡の立地と周辺遺跡

II 調査の概要

1 調査に至るまでの経緯

2 調査の概要

(1) 調査計画

(2) 調査結果

① 造構

② 造物

III まとめ

IV 図版および写真

付図 1 1号住居跡

2 2号 ↗

3 3・4・5号 ↗

4 集石造構

5 焼成造構

6 1号住居炉跡出土土器

写真

調査体制

・調査主体

長井市教育委員会

・調査指導

柏倉亮吉 / 山形大学名誉教授・県文化財

護審議会々長

小林達雄 / 国学院大学助教授

加藤 稔 / 山形県立山形工業高等学校教諭

・調査員

佐藤正四郎 / 長井市中央公民館長・県埋

蔵文化財保護指導委員

佐藤鎮雄 / 南陽市立赤湯中学校教諭

海野丈彦 / 長井市立長井小学校教諭

鈴木和夫 / 長井市立西根小学校教諭

・調査協力

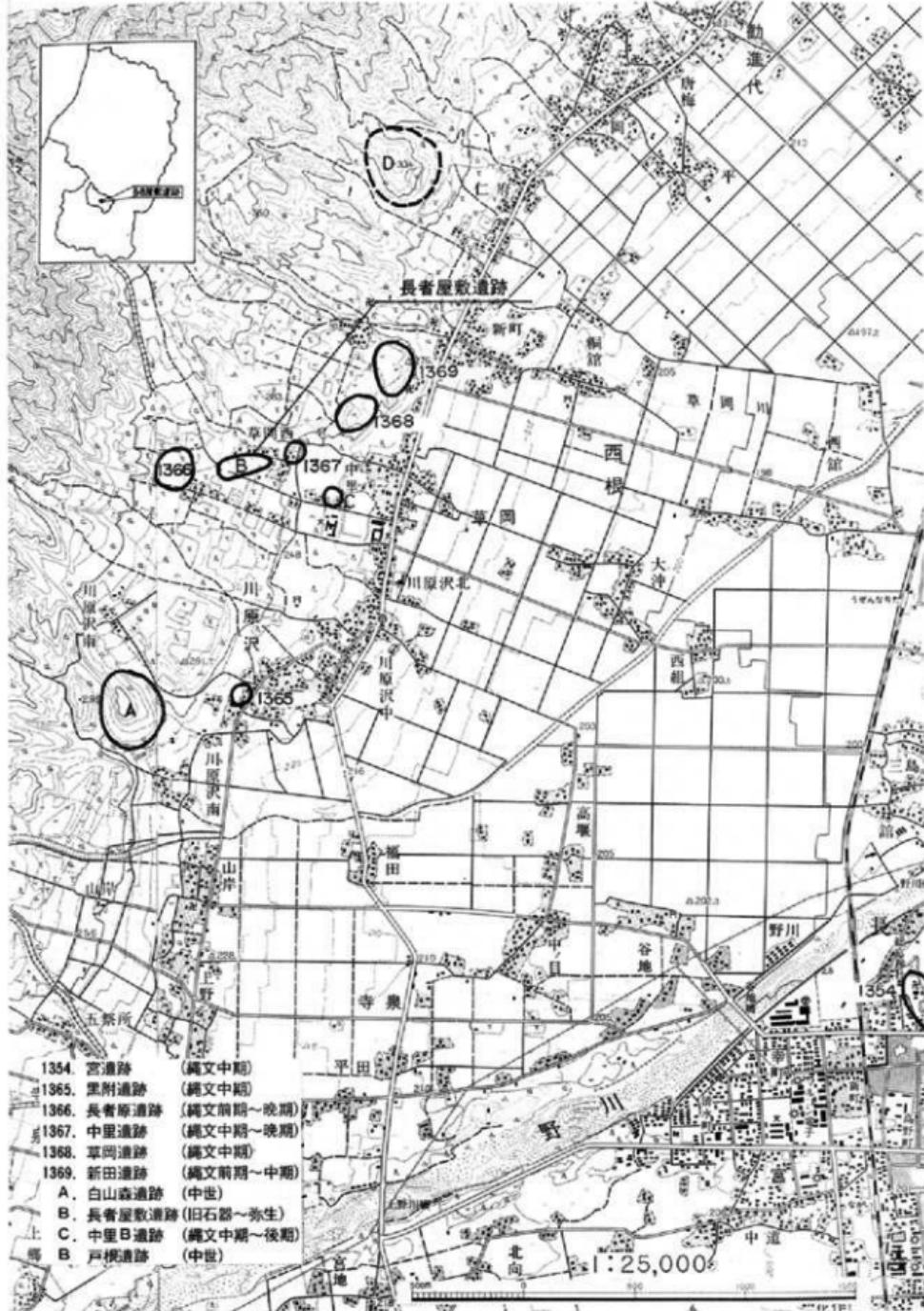
長井市文化財調査会 / 土地所有者 / 長者

屋敷遺跡保存会 / 草区会 / 草岡生産森林

組合 / 草西地区 / 県文化課職員 / 証賜考

古学会 / まんぎり会 / 山形大学学生 / 地

元学生・高校生



第1図 遺跡位置・分布図

I 遺跡の立地と周辺遺跡

長者屋敷遺跡は長井市大字草岡長者原地内に所在し、朝日山地山麓から東に張り出した舌状の台地上にある。本遺跡は、長井市立西根小学校の西方約700メートルに位置し、その台地は、古置賜湖の湖成段丘で、台地の規模は東西で300メートル、台地の基部で南北100、中央部で約50メートルの広さをもっている。台地全体が高燥で水はけもなく、背後には広大な原野があり、付近には西山から流れる中小の河川が幾筋もあり狩猟や漁労にも適し住居を営むには格好の場所であったと考えられる。特に北を流れる久川にはさけ、ますも沢山のぼってきたものと思われる。

しかし戦後の開発によって台地の南側5分の2は水田となり造構も殆ど壊わされているが、その他は畠地で桑園となっている。そして開墾には機械力が導入されなかつたので遺物・造構の保存状態も良好である。本遺跡の標高は基部で270メートルで東に緩やかに傾斜している。

長者原一帯は昔から土器や石器が出土し、地元の人たちや愛好家によって採集されたり時には遺物の堀り出しあなされたようである。そのようなことで長者原の名は広く知られていたが、出土遺物の多くは散逸している。

昭和37年の「山形県遺跡地名表」に登録された長者原遺跡は本遺跡の西に位置し、更に昭和53年刊行の遺跡地図には、長者原遺跡はNo.1366となり新たに中里遺跡がNo.1367として追加されている。本遺跡はその中間に位置するところに発見された新しい遺跡である。そして北側に広大な新田遺跡があり更に戸根・岡と続き5キロ北には旧石器の藏京遺跡に連っている。南には黒附遺跡・大沢遺跡と続き、東南4キロには宮遺跡がある。

II 調査の概要

1 調査に至るまでの経緯

昭和50年8月、西根小学校児童2名が遺跡付近の道路わきで土器片を発見しその周りを堀ったところ沢山の土器片を堀り出した。その土器片は何れも縄文中期のものであった。

その後直ちに台地を調査したところ桑園の至るところに土器片の散布がみられ台地全体が遺跡であることが認められた。その中で最も多く表面採集のできたところの土地所有者は、その桑園を水田にする計画が進めていることがわかったので、昭和52年長井市

教育委員会は、緊急にその一部の発掘調査を実施した。

調査によって判明したことは、縄文中期及び晩期の複合遺跡であることと、更に2時期の集落址群の遺跡ではなからうかとも予想することもできたのである。検出した遺構は、縄文中期末葉の住居跡1棟(1号住居)と2号住居の1部で今から約4000年前のものと推定した。

変動する経済社会の中で遺跡にあたる土地所有者は新たな土地利用の計画も進められており、その調査を実施し遺跡の性格と範囲の確認をしなければならないことを痛感させられた。その対策の1つとして長井市教育委員会は、昭和52年秋に台地全体を長井市史跡として指定した。また1号住居跡に覆屋を施しそれを保存し遺跡の活用をはかるとした。

2 調査の概要

(1) 調査計画

① 遺構確認の調査

台地全体に10メートルのメッシュを組み、その交点に 2×2 メートルのグリッドを組み部分発掘をして遺構の確認をする

② 遺跡の性格確認の調査

昨年度に設定した原点と基準線を基にして、基準線を東西に延ばしそれに直交する南北の線を設定し、昨年度の調査区を更に西と南に広げ 2×2 メートルのグリッド掘りで全面発掘をする。その場合中期・晩期の2時期にまたがることがわかったので、黒土の中での晩期の遺構検出に配慮する。

(2) 調査結果

① 検出した遺構

i) 3つの住居跡

1号住居の南西5メートルを距てて3つの住居跡—3号4号5号の住居跡を検出した。各住居の新旧の関係は、切り合いの状況と張り床の精査によって、5号住居がはじめてつくられ、次にそれを拡張して3号をつくり最後に3号の西の一部を含んでその西に4号住居をつくった跡が明らかになった。

5号と3号の住居は、同じ炉を使用していたので破損がひどい状態にあった。そして手前の石組みの石の1部は4号の炉に使用していたものもあった。3号(5号)の埋め戻しは2つ。4号の埋め戻しは1つの埋め戻しとその手前に3つの石で四角います状のものを使っていたが、何れも多量の炭くずが入っていたことから、埋め戻しと同じ機能をもたせて使用した

ものと思われた。

住居の大きさは、平面形で3号が 6.2×5.4 メートル、5号は 4.6×4.4 メートル、4号は 4.4×3.6 メートルであった。3つの住居は何れも炊き口のある周溝が直線状を呈し、かまばこ型をなす平面形が特長のように思われた。1号住居も 5.1×4.1 メートルでかまばこ状を呈していた。柱穴は検出したが、その数を明確にすることはできなかった。しかしどの住居も3乃至は4と推定した。

3つの住居跡は1・2号と同じく中期末葉で約4000年前のものと想定される。また4号住居の北東隅に深鉢(大木10式)が半分欠損された状態で床面にくい込んで(2センチ)伏せられていたが、同じように1号住居の北東隅にも深鉢が横倒しになっていたのも類似した状態と考えた。

また3号住居の北西隅、周溝の内側に高さ40センチの立石を配していた。

ii) 集石遺構

調査区の西南隅に集石の遺構を検出した。表土下の晩期の包含層からは大洞A'の土器片が多く出土したが、その下層で集石遺構を確認した。集石は約6~70センチから1.3メートル位の円形にまとまって西北方向に延びて環状にまわるのではないかとも予想したが、わずかな調査面積(36m²)なので今後の調査によらなければそれはわからないことである。

iii) 焼成遺構

付図(第5図)の遺構を、土器を焼いたかまど跡ではないかと判断し焼成遺構と呼称することにした。

調査の経緯は1辺約 3.3×2.5 メートルの不整の4辺形に近い濃い黒色土の輪郭を確認した。黒色の土質と土層は微粒の炭化物を多量に含み、さらさらした土質で30センチ余の層をなしていた。そこに南北の試掘溝を入れ調査した結果、中期末の土器(大木10式)3個体を出土した。それを4分法で掘り下げたのが第5図の遺構である。

焼成部と考えられる遺構は平面形 1×2 メートル、南側の深さ60センチ、北に向って勾配が上り傾斜は15°である。南側のピット北側の上半分は焼成部に連なっている。底部は中央部がまるくなつて壁面も底部に赤く焼けて固くなっていた。北側にあった花崗岩は熱のためボロボロの状態となっていた。

焼成部の東側に掘込みをした堅穴は 2.3×2 メートルの床をもつて、その中央と周りに柱穴をもっていた。この遺構は焼成部とのかかわりをもつかどうかはわからないが、焼成部と低い境をもつて連なっていることと床面の状態からあるいは工房のような機能を果したものではないかとも思われた。

焼成部及び堅穴からは中期の土器片を検出した。

IV) 土壌・土壌墓ピット群

○1号住居の西南隅に1.2×1.0×0.8メートルの土壌を検出、若干フラスコ状を呈し、検出した遺物は中期のものであった。また発掘区の西南隅に径1メートル深40センチで底部に小石を配した土壌を2つ検出。

○晚期の柱穴は多数検出したが住居跡の検出には至らなかった。

○一方住居の西側一帯に晚期の土壌墓群を検出した。その中で大きな石を割って蓋をしたと思われるものが7基を検出した。

V) 風倒木

発掘区の西北隅に3×3メートル、深さ1.3メートルのものは造構ではなく風倒木といわれるものと判断した。

② 遺 物

出土量が比較的少なく整理箱で約20箱程度である。

I) 土 器

深鉢（大木9b～10） 7

壺・鉢（大洞A'） 2

土器片

・縄文中期 ・全晩期（A A'が多い） ・弥生中期（少量）

・前期切頭（範囲確認の調査過程で）

・押型文土器片

晚期の包含層で晚期の土器と同時に出土した。

II) 石 器 類

・石斧 石鎌 石べら 石のみ

・石棒 凹石 すり石など

・どっこ石 石ハンマーなど

III ま と め

1. 本遺跡は縄文前期から弥生に至る複合遺跡であることがほぼ判明したが、その主体をなすものは、縄文中期の集落址であることを確認した。既ち5棟の住居は同じ円孤上にあり、しかも同時期のものなので更にこれを広げることによって集落の検出ができるのではないかとうかと考えた。しかし遺物の包含層や出土遺物の量などから晩期の時代にも

集落を形成していたのではないかとも考えられる。

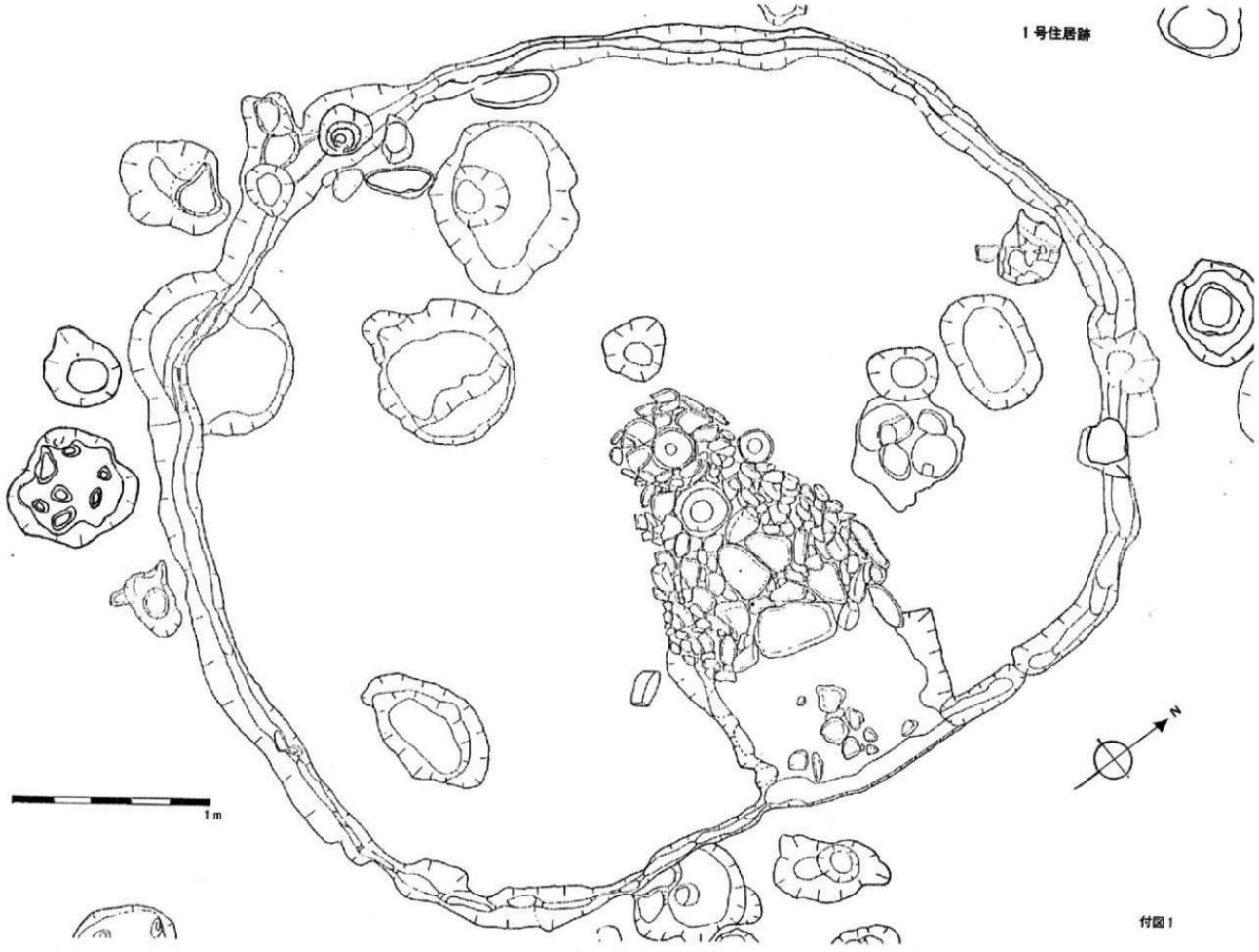
2. 範囲確認のための調査はその一部しか調査できなかつたが、どのグリッドからも遺物が出土し台地全域に遺跡の広がりをもつことが予想された。

3. 遺跡の性格はほぼ確認できたので、第2次の調査として範囲確認のことになりたい。

4. 遺跡の保護と活用を目標に地元を中心に西根地区全域で遺跡保存会がつくられ活動をすすめておられたことに深く敬意を表し感謝いたしたい。

5. 本調査が国の補助事業としていただいたこと、県文化の深いご理解とご指導、そして諸先生からのご指導を賜り多くの成果を収め得たのも、市や地主、地元の方がたによるご支援ご協力があったればこそと心から感謝の意を表します。

1号住居跡

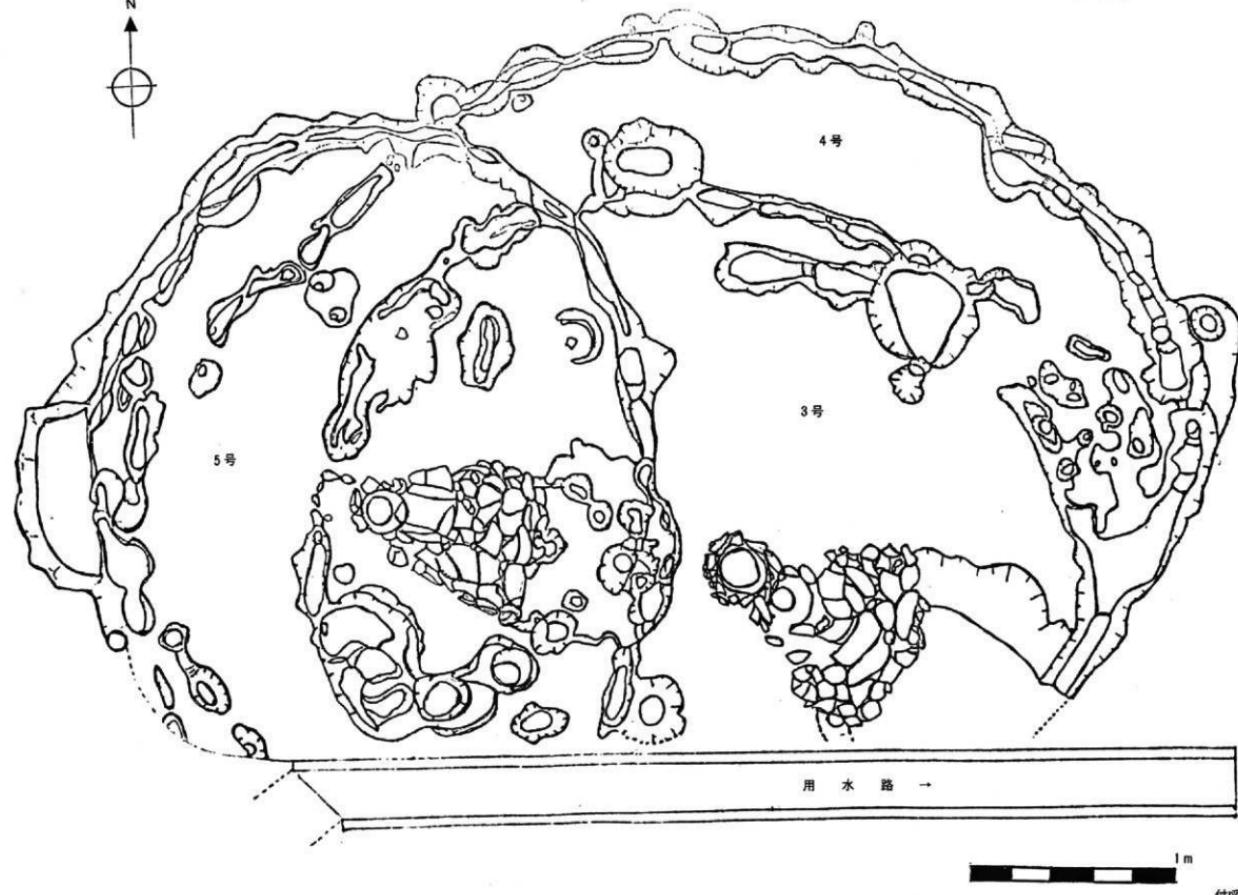


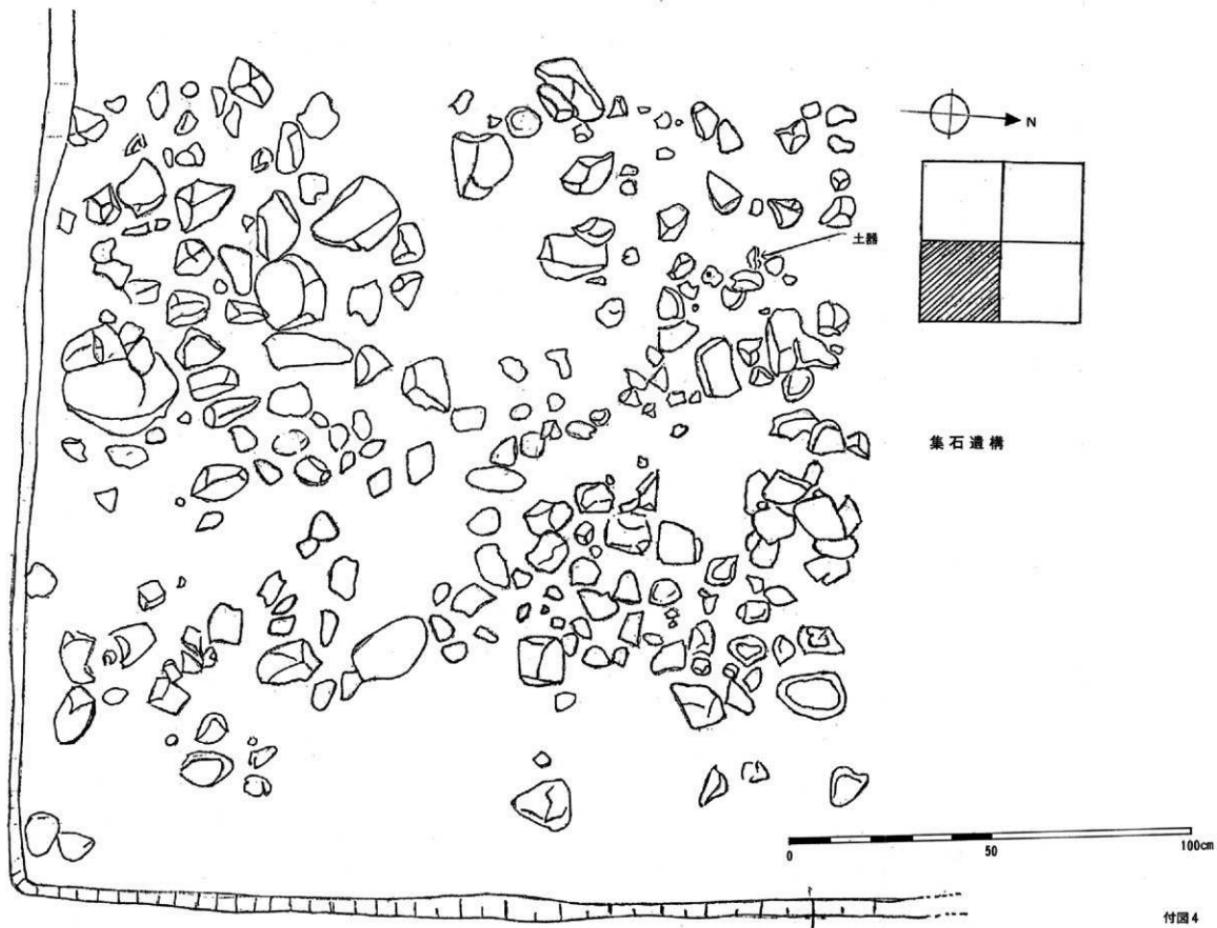
付図1

2号住居跡

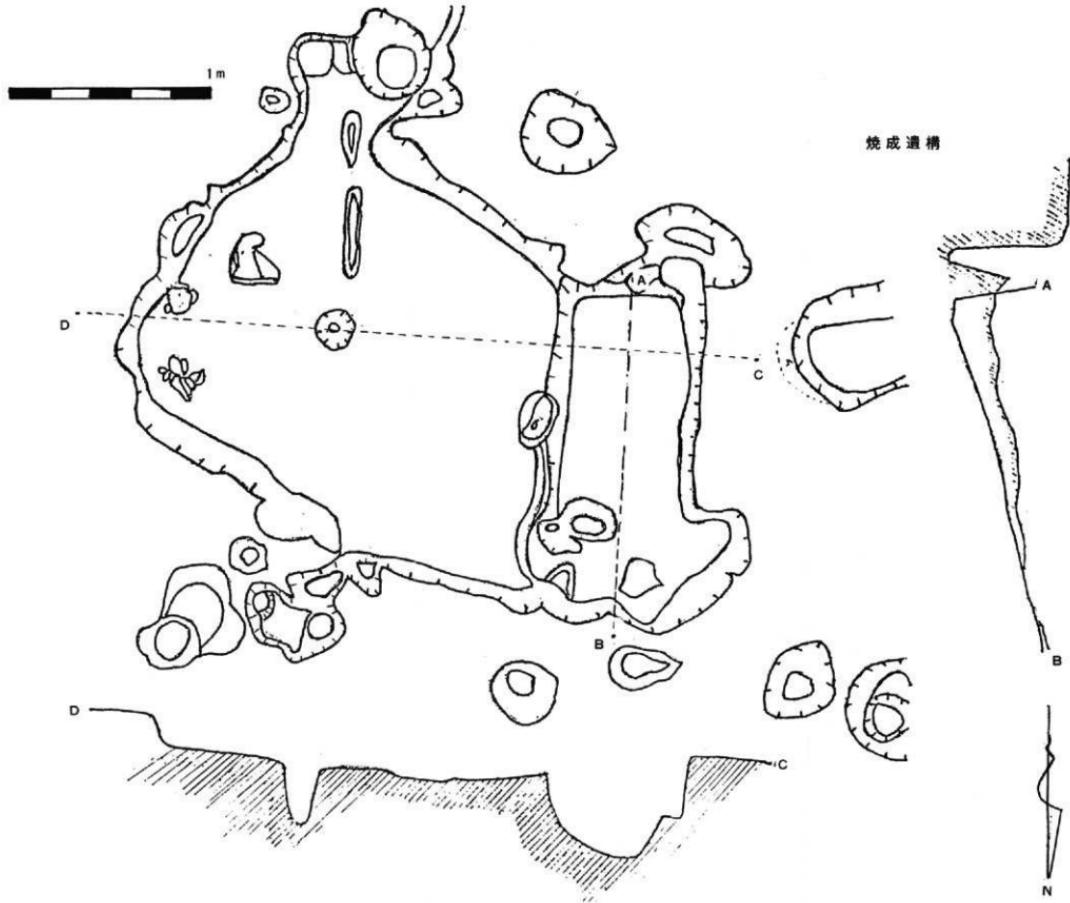


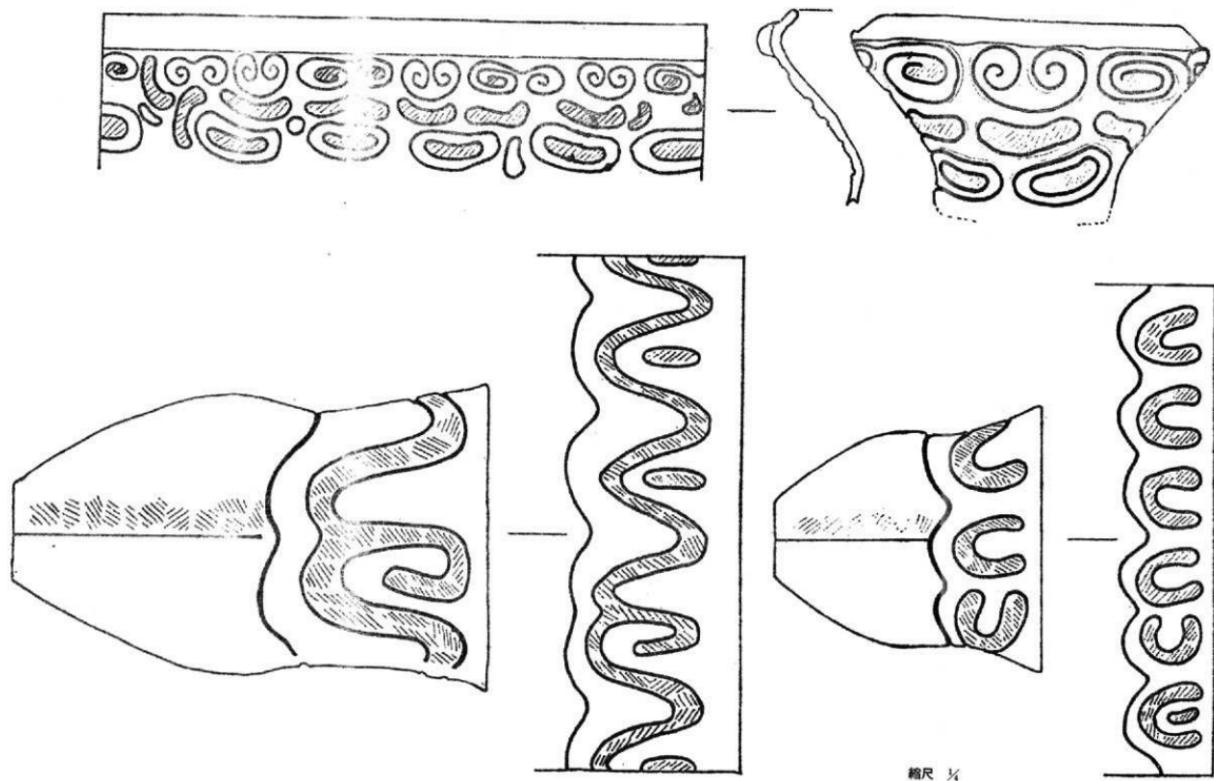
3·4·5号住居跡





付图4





第1号住居炉跡出土土器



1号住居跡

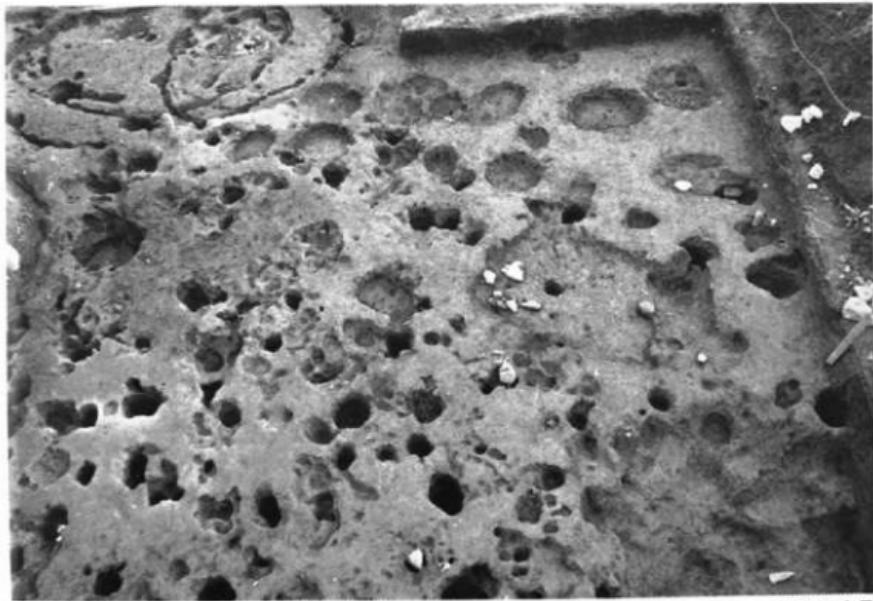


中期土器





立石を伴う住居跡（3号）



発掘区全景



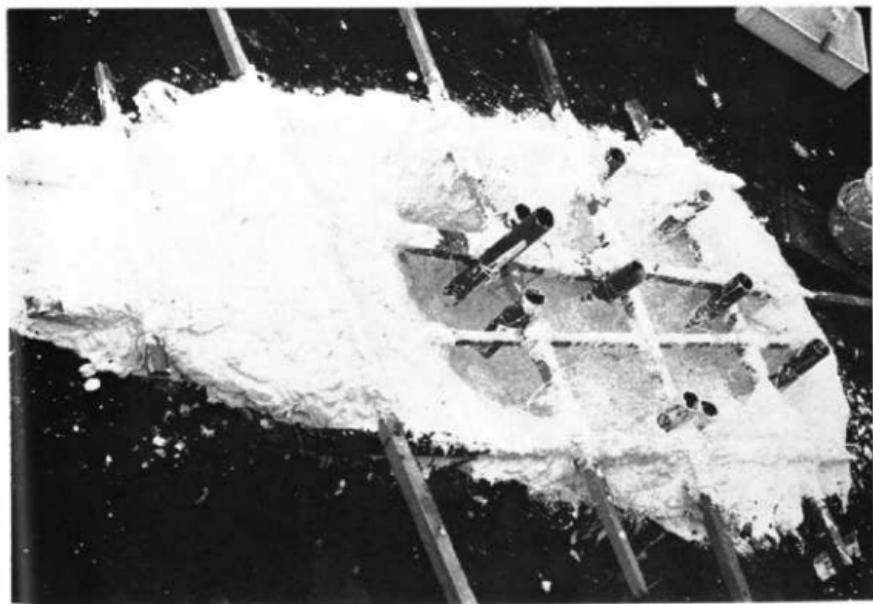
中期土器



中期土器



4号住居炉



4号の炉跡型取り作業

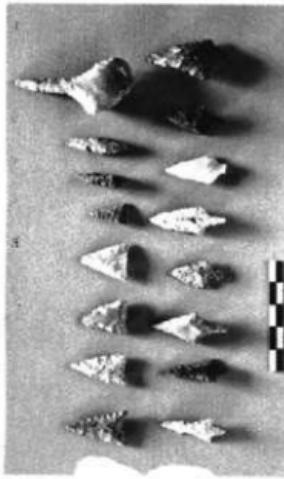
石斧



石斧等



石斧・石頭



古石



石



ちょう じや や しき
長者屋敷遺跡
第1次調査概報

昭和54年3月31日 印刷

昭和54年3月31日 発行

発行 長井市教育委員会
印刷 印刷の芳文社